

Title	「震災を通して考える日本の教会の『公会』性について」(第4回東日本大震災神学研究会発表：2013/02/15)
Author(s)	朝岡, 勝
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.2, 2013.12 : 13-18
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5041
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

第4回東日本大震災神学研究会発表[2013/02/15] 「震災を通して考える日本の教会の『公会』性について」

朝岡 勝

はじめに

震災から一年十一ヶ月が過ぎました。この間、私たち日本の教会は大きな問いかけを受け、その問いと向き合わざるを得ない日々を過ごして来ました。それは神の国に仕えるキリスト者一人一人に差し向けられた問いであり、とりわけ主イエスの御体なる教会に仕える牧師、伝道者たちに突きつけられた問いでもあります。

そのような中で、主の導きと、藤原先生の献身的なリーダーシップによって震災神学研究会が設けられ、学びと交わりが続けられていることを感謝し、その交わりに加えられていることを光栄に覚えております。今回は私自身が震災後のささやかな経験を通して考えさせられているこれからの教会の姿について発題させていただきます。

1. 変わるための問いを

私は被災地から離れた東京にいる牧師です。教会の仕え人、牧師として震災との関わりを持つように導かれて今に至っている者のひとりです。その間、私自身も主なる神からの大きな揺さぶりを受け、問いを突きつけられ、自分自身の神学的な思考を一からやり直さなければならない経験をさせられて来ました。いわゆる被災地と言われる場所に何度も足を運び、たくさんの方々と出会い、数多くの忘れられない言葉を聞きました。震災に関する書物を片っ端から読みましたし、神学者たちが発する発言にも注意を払って来ました。何と云っても切なる思いで祈りをささげ、御言葉に聞いて来ました。

そして今、この時に至ってあらためて思うのは、「私は変わったのか？」という問いです。そこでの「私」は単なる個人ということとどまりません。それは「私たちキリスト者は変わったのか？」という問いでもあり、そして「日本の教会は変わったの

か？」という問いもある。自分をそこから外しては問うことのできない問いかけ。自分もその答えについての責任を追わなければならない問いかけとして、このことを考えているのです。

2. 震災当日からのこと

震災当日の個人的な経験をお話したいと思います。私は千葉にある東京キリスト教学園のチャペルで震災に遭遇しました。卒業式の最中でした。夕方まで学園で足止めになり、その後、友人牧師の車に乗せてもらって7時間ほどかけて東京に戻りついた時には深夜1時を回っていました。翌土曜日は教会員や関係教会の安否確認と所属教団理事会での電話連絡、メール連絡に追われ、日曜日は朝の礼拝で震災のための特別の祈りの時を持ち、午後の活動はすべて休止としました。週が明けた14日の月曜日、本来なら掛川で同盟教団の理事会、続いて教団総会が開かれるはずが延期となったため、集まれる理事が教団事務所に集まって今後の当面の対応を決める話し合いのために、渋谷の笹塚まで自転車を出かけていきました。

14日の朝、私は教団の対応がどうなるにせよとにかく東北に向かいたいと思い、妻と長男に物資の買い出しを頼み、また親友の牧師と連絡を取り合って二人で東北行きの準備を始めていましたが、その午後の会合で教団地震対策本部が設置され、被災状況の調査とお見舞いを持参して現地を回るための派遣が決まり、その夜にワゴン車一杯の物資を積み込んで二人で出発したのです。後に分かったことは3月14日から15日にかけて福島第一原発の水素爆発が起こったため、セシウムやヨウ素、その他の多量の放射性物質がまき散らされて、広範な地域に汚染が及ぶことになったわけですが、その14日から15日の早朝に福島に向かう車中で感じた緊張感は忘れることができません。

教団の対策本部からの指示で一旦は福島から引

き返しかけたものの、いわきで私たちの到着を待っておられる方々の切羽詰まった声を携帯電話越しに聞き、あらためて方向転換をして六号国道を北上して行く途上、反対車線を続々といわきから避難して茨城方面に連なる大渋滞の車列を横目に見ながら、初めて死のことを感じたときでもあったのです。

この経験を通して、あらゆることを根本的に考え直さなければならない、そうでなければ前に進むことができない。そのような思いに強く駆られました。愛すること、仕えること、支えること、寄り添うこと。そういう一つ一つの言葉、しかも比較的キリスト者や教会が頻繁に口にする言葉が、単に語られるだけの言葉としてでなく、本当にリアルに生きられる現実となるために、私自身が具体的に変えられていかなければならない。言葉も振る舞いも存在そのものが福音的な存在へと作り替えられていかなければならない。そのように考え始めました。実際にそれが可能なことであるかもわからないまま、それでもそのことをひたすら求めて、その後、いわき、相馬、仙台、石巻、気仙沼、宮古、大槌、釜石、遠野、大船渡、福島、郡山と東北被災地の各地を訪ね歩きながら過ごして来たのが、この二年あまりの日々であったように思います。

3. 震災を通して見えた教会の姿

今回の震災支援の働きに携わる中で、非常に強く印象に残ったのは、教団・教派を超えた協力の姿でした。もちろん私の関わりの範囲は非常に限られたものに過ぎませんが、それでも震災後に被災地で一緒に支援活動に従事し、あるいは東京で様々な会合に出席し、そのようにして知り合った牧師たちは相当な人数になり、その所属教団・教派も多様です。この集まり自体も私にとっては実に新鮮な先生方との出会いの機会です。

私が教師として奉仕してきた二十年ほどの間にもさまざまなエキュメニカルな運動は盛んになり、

教派を超えた交流、協力は進んでいたのですが、少なくとも、福音派と呼ばれるグループの中にいる私自身の教団や教会にとっては、「日本福音同盟」(JEA) に属する教会との交わりはあっても、「日本キリスト教協議会」(NCC) 系の教会や先生方との交わりは非常に限られたものに過ぎませんでした。けれども震災を契機として、単なる儀礼的なやりとり、名目上の協力を超えて、実質的にも働くということが実現していることを実感します。特にこの点は被災地にあっては地域単位で組織されている各種の「ネットワーク」において顕著なことです。それまでは同じ地域に建てられてはいても、さほど交流のなかった教会が、震災を機に協力する、あるいはせざるをえなくなり、目に見えた協力の関係を築き上げている姿を見ると、そこに新しい教会の可能性を見ることができのです。

このような教会協力のネットワークが形成されていく経過から見えてくるのは、これらが組織同士、教派同士のオフィシャルな関係から作られていったというよりも、実際に地域教会が建てられている現場にあって、互いが一つの目的のために力を合わせる必要を痛感し、その必要に迫られ、促される仕方で、現場からの協力関係が作り上げられていったという事実です。中には自分たち教団・教派のみでの支援活動に専念したところもあったでしょうが、多くの場合は他団体、他教団・教派と何らかの協力をしたところが多かったのではないのでしょうか。それらのことが可能となったには、いくつかのポイントがあったと思いますが、思い当たるところで三つの点を挙げておきたいと思います。一つ目は「下からの一致」、二つ目は「目的による一致」、そして三つ目が「奉仕の姿勢による一致」ということです。

「下からの一致」とは、教会の組織において「上・下」という言葉の使い方には慎重でありたいと思いますが、要するに機関決定や正式の連絡によらない現場での一致協力が先行したということです。

つまりそこでは組織を作ったり、体制を整えることが目的ではなく、限られた物資、人力、お金、手段を共有しなければ働きようがない現実を前にして、実際に協力してともに働くために、必要最低限の約束事の中で一緒に働く姿ができあがっていったということでもあるのです。その点では教団・教派を超えて「あのの人を知っている」、「あのの人を知っている人を知っている」、「あのの人に聞けばだれかとつないでくれる」、「自分の持っているもの／いないものと、あの人の持っているもの／いないものが互いの必要に合致している」という互いの関係と、それらの中で随所におられた「ハブ」の役割に徹してくださる働き人の存在が非常に重要でした。

「目的による一致」とは、今述べたように、震災という大惨事を目の前にして、人々を助けなければならないという互いの働きの大きな目的が一致していたことで、そこに互いの長所、持ち味、得意分野などを総動員して一緒に働く体制が作られたということです。自分たちだけでは届き得ない働き、担い切れない働き、他と協力することでより人々に益になる働き、そういうところで互いに一致することができたのは大きな経験でした。

「奉仕の姿勢による一致」とは、これらの協力関係を作って行く上で、健全なリーダーシップ、奉仕的なリーダーシップが発揮されたことです。大きな団体、資金力のある団体、人材や装備がそろっている団体、経験豊富な専門的団体、被災地により多くの関係者を持つ団体など、ともに働く組織は規模もあり方も様々でしたが、しかし互いが主導権を取り合ったり、自分たちのやり方を押しつけ合ったり、「金を出すので口も出す」的な振る舞いをする事なく、互いに仕え合い、そして何よりも皆が目の前にいる一人の存在に仕えるという姿勢に徹することで、主導権争いや利害関係の対立、資金の奪い合いや手柄の取り合い、足の引張り合い、といった愚かしい事態からある程度守られることができたのではないのでしょうか。

4. 新しい教会論の構想

震災当初に見られたこれらの協力の姿は、緊急事態の中で自然発生的に、あるいは必要に迫られる中で作られていった応急体制であって、これをもって何か新しい教会論を構想するというのは不適切なことかもしれません。実際に震災から二年近くの日々が経過する中で、震災直後に見られた協力関係が今もどこまで維持されているかについても、いずれきちんとした振り返りが必要でしょう。当初は一緒に協力して働けた教会同士が、やがて人やお金のマネージメント、活動の方針や優先順位、宣教理解、その後の財産の帰属などを巡ってそれぞれの所属教団の意向との調整や、地域にある教会間の調整の結果、より深い協力に進んだ例もあるでしょうが、多くの場合は既存の教団・教派の枠組みに収斂していったことのほうが多かったのではないかと考えます。

それでも一つの事実として、震災後の日本において、それまでの過去の実績を超えて、かつてなかったほどの非常に広範囲な教会の一致と協力が可能となったことは大きな意味を持つ出来事であったと言えるでしょう。そしてそれを単なる一時的な応急の事柄として終わらせてしまうのは残念なことと考えます。そこに私たちは新しい教会論を構想することは無謀な企てでしょうか。確かに古代以来の「正典の決定・信条の制定・職制の成立」をもって教会を定義する伝統的な教会論からすれば、それらによらない教会論を構想すること自体が無理なことでしょうが、制度的な教会論というよりも、それぞれが歴史的・伝統的な教会のあり方を保持し、互いにそれらを尊重しつつも、ダイナミックに働かざる教会の形態ということが考えられる余地はないのでしょうか。

もとより私自身は歴史的・伝統的な教会論、教派性の持つ意味を積極的に教えられてきました。自らの生まれ育った教會的背景がそのようなものでなかったこともあって、むしろ改革・長老主義

の神学と教会論から多く教えられてきたものです。それらを踏まえた上で、あえてなおそれを超えた教会論を先生方とともに構想することが許されたらと願います。それは3.11以前には自分の中に思い浮かぶことのなかった新しい願いなのです。

5. 日本基督公会の問題

そこでようやく、今回の発題のテーマである「震災を通して考える日本の教会の『公会』性について」ということを考えたいのです。ここでは1941年6月に創立された、合同教団としての日本基督教団のことを直接に論じる意図はありません。むしろ1872年3月の横浜公会とそれに先立つ宣教師たちの構想した「公会」の理想に遡って、過去を振り返りつつ、今の日本の教会の姿を見つめ、さらにはこれからの教会の姿を仰ぎ見たいと願っているのです。

公会の性格や特質を巡っては日本キリスト教史の研究者の間でも様々な見解が出されていますが、日本キリスト教会の五十嵐喜和氏は次のように定義します。「日本基督公会の性格は、福音主義、独立主義を標榜し、それに教会制度としては組合・長老主義とも言うべきもので、また万国福音同盟会の九箇条を自己の信仰告白として採用したことから『教会即キリスト者の運動体』として自らを理解した教会であったと見ることができる」（五十嵐喜和「日本基督教会史」『日本プロテスタント諸教派史の研究』）。さらに同じく五十嵐論文「旧日本基督教会の伝統と公会」では、公会の性格を先の「正典の決定・信条の制定・職制の成立」という観点から考察し、公会が伝統的な長老・改革主義教会と組合教会の教会論の「玉虫色」の性格であったと結論づけています。しかもその際に、公会の進行の基準として採用したのは、19世紀キリスト教の大覚醒運動やリヴァイヴァリズムの影響の下で結成された万国福音同盟会の簡易な信仰基準であり、それによって「キリスト者の運動体」という性格を持つに至ったと考えられるのです。

改革派、長老派から派遣された宣教師たちによって指導された公会が、なぜ自らの伝統的な信条ではなく、超教派的な簡易な信仰簡条を定めたのかという問いについては、宣教師たちの本国における諸事情、アメリカンボードを巡る問題、合衆国長老教会内のオールドスクールとニュースクールの対立や、宣教師たちの過去の宣教地での経験から、新しい宣教地に不要な教派的対立を持ち込むことを嫌い、超教派的な教会形成を目指していたことも踏まえなければなりません。これらのことは今日でも長老・改革系の教派からは批判的に見られる点ですが、しかしいずれにしても初期の宣教師たち、そして日本人キリスト者たちが抱いた幻、それは「日本に一つの教会を建てる」ということであり、既成の教派的伝統によらない「公会」を建てることだったのです。

6. 公会における伝統の問題

このように公会設立に関わった宣教師たちは、日本という宣教地における福音宣教と一つの教会を建てるという幻に向けて、ともすればその障壁となりかねない「教派」という要素を極力排除してその協力を推進したいと考えていました。しかしその後の教会の歴史を辿ると、そのようにして生み出された公会は、かえって「日本的」な精神に過剰に同調しようとするメンタリティーを持ち、さらには欧米諸教派とは独立した「日本国」基督公会を建設するというアイデンティティーを確立していきました。教派的伝統を乗り越えることが、結果的には他の伝統に進んで接続するという結果をもたらし、その「他の伝統」こそが日本的な伝統、日本的なアイデンティティーだったのではないかと考えられるのです。そしてこのような仕方では、その後の日本における教会の形成に、今なお深刻な問いを投げかけているのではないかと思います。

7. 教会の使徒性を巡って

「伝統」の問題はある意味で、教会の「過去」に属する問題です。過去の歴史の蓄積の上によって教会もまた規定されているという事実は否めません。けれども教会は「過去」によって規定されるとともに、「未来」に向かって開かれた存在でもあります。教会にとっての「未来」とは、再び来たりたもう主イエス・キリストによる神の国の完成としての「終末」にほかなりません。教会は終末における神の国の完成を目指して歩む旅人としての共同体でもあります。そしてその場合の「終末」に向かう教会を方向付け、導き、引っ張る重要な機能が、教会の「使徒性」の理解にあると考えます。

ニカイア・コンスタンティノポリス信条は、教会について「我らは唯一にして聖なる、公同の使徒的教会を信ず」と告白しますが、そこでの教会の使徒性という属性は、唯一性、聖性、公同性の全体に関係しています。ユルゲン・モルトマンは『聖霊の力における教会』の中で、教会の使徒性は他の三つの属性の中で特別な位置を占めており、これら三つの属性は、使徒性において明らかになり、確実にになると言います。なぜなら教会が唯一であり、聖であり、公同のものであることは、使徒たちの証言、宣教、派遣によって歴史の現実となるからなのです。教会の使徒性を考えるにあたっては、「使徒的伝承」、「使徒的教え」とともに、あるいはそれ以上に、「使徒的派遣」そして「使徒的奉仕」の側面を正しく捉えることが非常に重要でしょう。今日、教会が使徒的であるという時、それは使徒たちの教えた福音の教え、「伝えられた教えの規準」（ローマ6:17）、「聖徒にひとたび伝えられた信仰」（ユダ3）を教え、福音を宣べ伝え、使徒たちが派遣されたように人々を主の証人として遣わすことを意味しています。それゆえに私たちも、「我らは唯一にして聖なる、公同の使徒的教会を信ず」と告白しながら、聖書に記された使徒たちの教えを担い、使徒たちが果敢に取り組んだ宣教を

遂行し、使徒たちのように私たちも派遣されていくことによって、私たちは神の国のために奉仕し、神の国の成就に向けて進んでいくのです。

「アポストラートの神学」（宣教の神学、使徒性の神学）を語ったオランダの改革派神学者アーノルド・ファン・ルーラーがその晩年に情熱を注いだ仕事は、オランダ改革派教会の教会規程改定作業であったと言われます。しかもその際にファン・ルーラーが特に重視したのは、この教会規程を「教会の使徒性」の具体化として示そうとした点にあったとも言われます。そこではまさに「教会」を終末に向かう神の国の「使徒的派遣」によって動的に方向付けようと考えていたというのです。この視点は今日の私たちのあり方にとっても重要な示唆を含んでいると言えるでしょう。

8. 教会における奉仕の形態

さらに教会の使徒性を考えるにあたって、「使徒的奉仕」ということを捉えることが重要です。特に3.11後のこの国にあって、教会は互いに仕え合う奉仕的形態をとるとともに、この世に対して奉仕するしもべの形態を取ることににおいて一つの公同の教会としてのかたちをとることができるのではないのでしょうか。

カール・バルトは教会教義学和解論Ⅲ／4の「教団の奉仕」において、次のような重要な指摘をしています。「どんな説教も福音伝道も魂の配慮も、同時にディアコニーの活動である必要がないような—あるいはそれを直接間接に包含する必要がないようなものは存在しないが、同様に、ディアコニーが、ひそかにかあらわにか同時に説教・福音伝道・魂の配慮でもある必要がないというようなディアコニーの形式も存在しない」。さらにバルトは次のようにも言います。「ディアコニーにおいては、教団は、イエス・キリストにおいて起こった和解や御国や神と隣人への愛の全体的（コスミッシュ）性格を—したがって教団が説教・福音伝道・魂の配慮ミッション等においても人々の間でしな

ければならぬ証しの内容の全体的（コスミッシュ）性格を、少なくとも徴として示す機会を持つのである。すなわち、特に肉体的・物質的に生きる人間のために—したがって全人間のために自分を捧げるこのところにおいてこそ、教団は、そのような機会を持つのである。そこでは教団は、その使信が結局は言葉・思想・観念・感情であって、精々ある種の道徳的要求にすぎないなどという誤解を免れる」。

ここで目を留めたいのが主イエス・キリストの「全体的」性格と、主イエスの証しの内容の「全体的」性格の結びつきです。そこでは主イエスの存在と御業、とりわけ愛の御業の有り様の全体と主イエスの証言の有り様の全体とが密接かつ相互内在的に結びつき、しかもそれらが抽象的・観念的な仕方ではなく、きわめてリアルでものとして、つまりしもべとなられた主イエス・キリストのリアリティーに沿った仕方で実現しているのです。ここに、今日の教会の取るべき奉仕の形態、しもべの姿があると言えるでしょう。それは単なる主イエスの模倣でなく、レトリックでなく、類比でなく、神が人となられたその現実に沿って、聖霊が住まわれる神の宮としての教会の現実として、「仕えられるためではなく、かえって仕えるため」と主イエス自らが言われた「しもべ」の形態を取るのです。

震災後の教会は、自らの「ディアコニア」の役割についてあらためて自覚させられたのではないのでしょうか。もちろんディアコニアの課題は震災以前からあり、またそれと取り組んでこられた教会もあり、この課題は日本だけのものでなく、世界大の課題でもあり、決して今回の震災だけに収斂される特殊な課題でなく、教会がいつの時代にも取り組むべき普遍的な課題でもあるでしょう。それでも私たちは事柄を一般化・抽象化させることなく、これらの課題に具体的に取り組み続けるために、目の前にある現実、3.11後の現実から出発するという姿勢を自覚的に保持したいのです。

おわりに

日本の教会の「公会」性を考えるにあたって、教会の使徒性、とりわけ使徒的派遣、使徒的奉仕について考えてきました。要するに考えていることは極めて単純なことで、互いに伝統も異なり、神学もその表現も異なり、規模も異なる日本の諸教会が、互いに仕え合い、またこの世に仕えるしもべの形態をとり、神の国の派遣と奉仕に生きる時、そこで教会は目的論的に規定された姿、すなわち神の国への奉仕という使命によって一つとされる公同の姿をとることができるのではないかと、ということです。それは制度的一致ということにはなり得ないかもしれませんが、むしろ緩やかに繋がり合い、互いに仕え合い、使命のために連携し、協働し、コラボレートし、そのようにして一つにされて生きて働く教会。そのような新しいダイナミックな公同の教会の姿を構想することができるのではないのでしょうか。

（あさおか・まさる 日本同盟基督教団 徳丸町キリスト教会牧師）